

池田市埋蔵文化財発掘調査概報

1989年度

1990年3月

池田市教育委員会

# 池田市埋蔵文化財発掘調査概報

1989年度

禪城寺遺跡発掘調査

神田南遺跡発掘調査

1990年3月

池田市教育委員会

## 序 文

縦聳かな五月山と雄大な猪名川の流れに育まれた池田市は、古代から現代に至るまでこの地方の政治、経済、文化の中心として発達してきました。

近年では大阪のベットタウンとしての役割も担い、多くの住宅が建設されるとともに道路、公園、下水道などの生活基盤が着々と整備され、住宅都市として急激な開発が推し進められてきております。

しかし、こうした開発の代價として先人が私たちに残してくれた貴重な文化財が破壊散逸していくのも事実であります。

膨大な文化財の破壊と保護、この二つの側面の矛盾はますます激しいものとなり、現代社会において非常に深刻な問題になっておりますが、文化財を保護し未来へ継承することは現代に生きる私たちの責務です。また、文化財から私たちと同じ郷土に生きた先人の知恵や経験、或いは反省を学びとることで、未来に向って住みよい、豊かな市民生活が実現できるのではないかでしょうか。

この報告書は、以上のことと踏まえ、危機に直面している遺跡について、国及び大阪府の補助を受けて実施した発掘調査の概要報告書であります。

調査の実施にあたっては、多くの御指導、御助言をいただいた諸先生や関係機関をはじめ、土地所有者、近隣住民の方々には文化財保護に対して格別の御理解と御協力をいただきました。心より感謝と敬意を表し、発刊の御挨拶といたします。

平成2年3月

池田市教育委員会

教育長 片山 久男

## 例　　言

- 1、本書は、池田市教育委員会が平成元年度国庫補助事業（総額1,000,000円、国庫50%、府費25%）として計画、実施した埋蔵文化財の緊急発掘調査の概要報告書である。
- 2、本年度の調査及び期間は下記のとおりである。  
禪城寺遺跡1次　池田市宇保町273-4　平成2年2月8日～13日  
神田南遺跡1次　池田市神田3丁目1750-1　平成2年2月19日～26日
- 3、調査は、池田市教育委員会教育部社会教育課文化財係が実施し、田上雅則が現地を担当した。
- 4、本書の編集、執筆は田上が行った。また、本書の作成にあたり、橋田正徳、大戸満成、大森美保、小川雅江、菜田哲夫、村山倫弘の協力を得た。
- 5、調査の進行にあたって、施主並びに近隣住民の方々に深甚なる御理解、御協力をいただいた。末筆ではありますが、深く感謝いたします。

## 目 次

1、歴史的環境 .....	1
禅城寺遺跡発掘調査	
1、はじめ .....	5
2、周辺の遺跡 .....	6
3、調査の概要 .....	6
4、出土遺物 .....	8
神田南遺跡発掘調査	
1、はじめ .....	9
2、調査の概要 .....	11
3、出土遺物 .....	12

## 図 版

### 禅城寺遺跡

- 図版 1 (1) 調査前の状況  
(2) 第1トレンチ

- 図版 2 (1) 土層断面  
(2) 出土遺物

### 神田南遺跡

- 図版 3 (1) 調査前の状況  
(2) 第1トレンチ

- 図版 4 (1) 第1トレンチ土層断面  
(2) 同上

- 図版 5 (1) 第2トレンチ  
(2) 出土遺物

## 挿図目次

第1図 豊島南遺跡方形周溝墓	1
第2図 遺跡分布図	2
第3図 妙三堂古墳石室	3
第4図 豊島南遺跡低墳丘墳	3
柳城寺遺跡	
第5図 調査位置図	5
第6図 トレンチ配置図	6
第7図 第1トレンチ平・断面図	7
第8図 第2トレンチ平・断面図	8
第9図 出土遺物実測図	8
神田南遺跡	
第10図 調査位置図	9
第11図 トレンチ配置図	10
第12図 第1トレンチ平・断面図	11
第13図 第2トレンチ平・断面図	12
第14図 出土遺物実測図	12

## I. 歴史的環境

池田市は、大阪府の西北部にあり南北に細長い市域を形成している。その位置は、西摂平野の北部、丹波山地に源を発する猪名川が北摂山地を分断して平野部に出たところにあり、谷口都市として古くから物質流通や文化交流に中心的な役割を果たしてきた。

地形的にみると、本市の東北部から中央部にかけて標高400m前後の北摂山地が市域の半分以上を占めている。その南側はほぼ東西に断層崖が走行して麓との間は急斜面となり、また、この断層崖に直交して幾つものV字状の谷が形成されている。更に南側には複合層状地の五月山丘陵が発達している。一方、北摂山地の北側は妙見山に源を発する久安寺川によって沖積平野が形成され、その北部には緩やかな古江台地が広がる。市の西側は猪名川によって画され、南方へ肥沃な沖積平野が展開している。

こうした自然地形をもつ池田市には現在までに45箇所の遺跡が知られている。

旧石器時代の遺跡の実態については明確にされていないが、遺物の出土したものとして伊居太神社参道遺跡、宮の前遺跡がある。伊居太神社参道遺跡は五月山西端部に位置する。現在まで発掘調査は実施されていないが、明治年間から石器が採集されその中に少量ではあるがナイフ形石器、尖頭器等旧石器時代に比定されるものがふくまれている。また、宮の前遺跡では昭和61年に大阪府教育委員会によって実施された発掘調査で1点国府型ナイフ形石器が出土している。

縄文時代では、上述した伊居太神社参道遺跡の他、五月山丘陵の京中遺跡で石鏃、石ヒ等がまた、近隣の畠ではサヌカイト製の尖頭器が採集されている。一方、南方の台地では神田北遺跡で石鏃、石ヒが、宮の前遺跡では石棒が採集されている。土器について池田城跡、農島南遺跡の発掘調査で縄文時代晚期の突帯文土器が出土している。このように現在まで少量の遺物が出土しているものの遺構は検出できておらず、遺跡の性格や規模は明らかでなく、また、当該期の遺跡が増える可能性も十分に予測される。

弥生時代になると、広範囲に遺跡が分布するようになる。このうち前期から見られるのは五月山北麓の木部遺跡があり、工事中に前期から後期の土器が発見されている。しかし、現在まで発掘調査は行われていないため、猪名川流域の母集落であるのか、あるいは川西市加茂遺跡や栄根遺跡などのような関係であったのか明らかでないが、当地域の弥生時代の動向を捉える上で非常に興味



図-1 豊島南遺跡方形周溝墓



1. 銀ヶ池遺跡 2. 古江北古墳 3. 古江北古墳 4. 吉田遺跡 5. 古江遺跡 6. 木部遺跡 7. 木部1号墳  
 8. 木部2号墳 9. 木部桃山古墳 10. 爱宕神社遺跡 11. 伊閉太神社參道遺跡 12. 梶三堂古墳  
 13. 梶三堂南古墳 14. 池田城跡 15. 池田茶臼山古墳 16. 五月ヶ丘古墳 17. 丹波北遺跡 18. 善海1号墳  
 19. 善海2号墳 20. 新羅庵寺跡 21. 新羅庵寺跡 22. 烟有告尖頭器出土地 23. 京中遺跡 24. 夏禪池遺跡  
 25. 野田塚古墳 26. 鈴塚古墳 27. 鈴塚南遺跡 28. 鎧冢古墳 29. 石橋古墳 30. 二子塚古墳 31. 禅城寺遺跡  
 32. 宇保稻名津彦神社古墳 33. 宇保遺跡 34. 神田北遺跡 35. 鎧冢古墳 36. 門田遺跡 37. 神田南遺跡  
 38. 天神遺跡 39. 豊島南遺跡 40. 住吉宮の前遺跡 41. 宮の前遺跡 42. 待森山遺跡

第2図 遺跡分布図

深い遺跡である。中期の遺跡は南方の洪積台地縁辺部に宮の前遺跡や豊島南遺跡など、沖積平野に生産基盤を置いたと考えられる大集落が出現する。何れも発掘調査が行われており、宮の前遺跡は中期前葉から後葉までの竪穴式住居跡、方形周溝墓等が、豊島南遺跡でも中期後葉の方形周溝墓が検出されている。後期になると宮の前遺跡や豊島南遺跡は消滅し、鼓ヶ滝遺跡、神田北遺跡、京中遺跡や、五月山山頂には高地性集落と考えられる愛宕神社遺跡がみられ、また池田城跡下層でも確認されている。

池田市内の古墳は前期のものとして前方後円墳の池田茶臼山古墳、円墳で過去に画文帯神獸鏡が出土した娘三堂古墳がある。娘三堂古墳は本年度に再調査を実施し、流紋岩を用いた竪穴式石室を確認した。石室については明治30年に発掘された際の記録で段を有する石室と報告されていたが、地震に伴う地滑りによることが明らかとなった。また、池田茶臼山古墳に比べて娘三堂古墳の方が石室の構築に簡略化がみられるとともに、石室や墳丘の規模が小さく埴輪、葺石が見られないことから、娘三堂古墳が池田茶臼山古墳に後出するものと考えられ、当地域の勢力が減少していったことを示しているものと推定される。中期ではこうした茶臼山古墳から娘三堂古墳へ推移し遂には衰退していったかのように高塚古墳はみられなくなり、かわって宮の前遺跡や豊島南遺跡に低墳丘古墳が出現する。後期には善海1・2号墳、木部1・2号墳、木部桃山古墳、五月ヶ丘古墳等横穴式石室を主体部とする小規模古墳が単独、あるいは2~3基を一単位として分布し、猪名川西方の長尾山にみられるような群集墳は形成されない。しかし、こうした小規模古墳の中にあって、巨大な横穴式石室を主体部とする鉢塚古墳や前方後円墳の二子塚古墳はその内容において卓抜しており、畿内中枢部か他地域との関係が想定される。古墳時代の集落として宮の前遺跡、豊島南遺跡があり、特に豊島



第図3 娘三堂古墳石室



第4図 豊島南遺跡低墳丘古墳

南遺跡では前期から後期まで存続している。また、神田北遺跡、鉢塚南遺跡、宇保遺跡で遺物が出土しているが、遺構については明らかにできていない。

歴史時代の遺跡については現在のところ十分には明らかにできていない。古代寺院として白鳳時代の瓦が採集された石積廃寺があるが、発掘調査は行われておらず伽藍は不明である。集落跡では西国街道沿に位置する宮の前遺跡や豊島南遺跡で据立柱建物跡が検出され、特に、宮の前遺跡では群衆的や役割を担う建物群と推定される。中世では神田北遺跡で建物群を検出しておらず、古代末から中世に亘って開発された呉庭荘に関わるものと推定される。室町時代以降は国人池田氏の櫓頭によって衰退し、池田氏の居館である池田城が政治、文化の中心地となる。池田城は五月山南麓の標高30～50mに築造された中世城郭で、その縄張りは必ずしも明らかではないが、現在でも堀が良好に残る主郭部では一部発掘調査が行われ、15世紀の庭園遺構や主殿と考えられる建物跡が検出され、池田氏の繁栄を証拠付ける遺構として重要視されている。また、池田の町屋を取り囲んで惣構を形成していた可能性があり、今後の発掘調査によって確認する必要がある。

#### 参考文献

富田好久『考古学上に現れた池田』『新版池田市史概説篇』 1971年

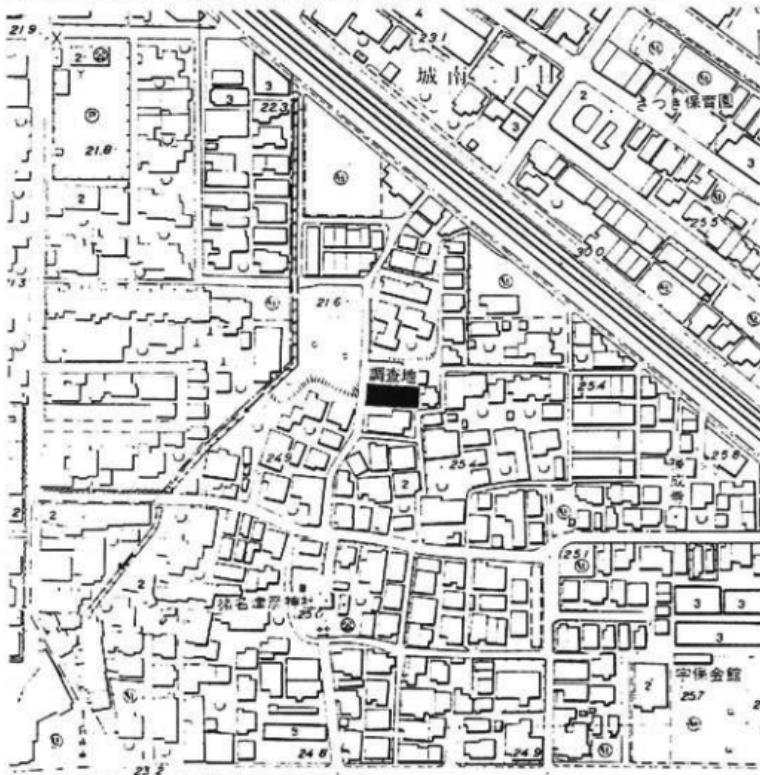
橋高和明『原始・古代の池田』池田市立中学校地歴部 1985年

## II. 禅城寺遺跡発掘調査

### (1) はじめに

中世の池田は、坂上氏によって呉庭莊が開発され、近辺を圧する勢威を誇っていた。この呉庭莊は所領支配強化のため、平安時代後期に後白河院の御願寺となつた法華寺の荘園として寄進されたが、鎌倉開幕期に後白河院の手から離れ、牛頭天王を祭神とする呉庭總社を創建しその社領莊園として直接支配が図られた。また、宗教上の権能によって、莊園經營を円滑におこなう支配体制を整えるため、呉庭總社とともに氏寺として善城寺が創建された。

禅城寺は坂上系図に見える善城寺の後身とされ、『穴穂宮拾要記末』(伊居太神社所蔵)によれば応仁の乱によって焼亡したとされる。宇保町に俗に「宇保の観音さん」と呼ばれる祠があ



第5図 調査位置図

あり、正式な名称は禪城寺とされ、昭和初期の区画整理がおこなわれた際、この祠付近で中世の瓦が採集されている。このことから、祠付近に禪城寺が存在していたと推定されているが、その実態については現在何一つ判っていない。

昭和61年、「宇保の觀音さん」の西方200mでマンション建設中に中世の瓦等が採集された。池田市教育委員会にその情報が寄せられた時は既にそのマンションは完成していたため、土層の観察が不可能で出土層位の確認はできなかった。しかし、禪城寺に関係する遺跡の存在が十分に予測されることから文化財保護法第57条の通知をおこない、禪城寺遺跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に含められることになった。

#### 参考文献

『新版池田市史概説』1971年

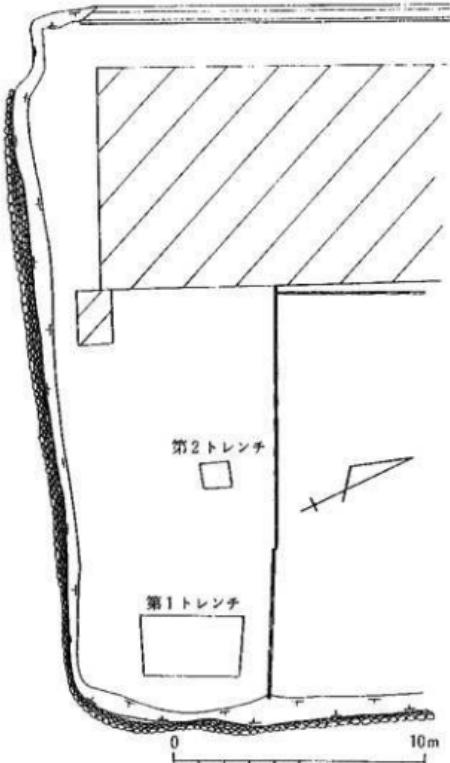
『池田市史史料編』1987年

#### (2) 周辺の遺跡

禪城寺遺跡の周辺として、その南方に神田北遺跡がある。ここでは今までに6次の調査を実施しており、弥生時代後期の堅穴式住居跡の他、中世とおもわれる掘立柱建物跡を検出しており、上述した呂庭荘に関連するものと推定している。また、宇保遺跡でも須恵器片が採集されており、木遺跡を含め、現在周知の埋蔵文化財包蔵地としている範囲以上に遺跡が広がる可能性がある。あるいは一つの遺跡とも考えられ、今後、付近の開発に十分注意すべき地域である。

#### (3) 調査の概要

調査地は池田市宇保町273-4に所在し、個人住宅の改築に伴う事前調査として実施し



第6図 トレンチ配置図

た。本遺跡は今回初めて調査を実施するため全面調査が望ましかつたが、遺構面までの深さが明らかでなく事前にトレンチを設定した。しかし、調査を進めていった結果地山面が1mと深く、建築物が木造で基礎が非常に浅く建築に支障を来すことから全面調査を取りやめ、トレンチ調査に止どめることにした。

本調査地の層序は6層からなる。第1層は現代の畑に伴う耕作土、第2層は瓦礫を含む整地土である。また、第3層は宅地化される以前の畑に伴う耕作土である。第4層は橙茶色砂質土として近世の遺物を含んでいる。

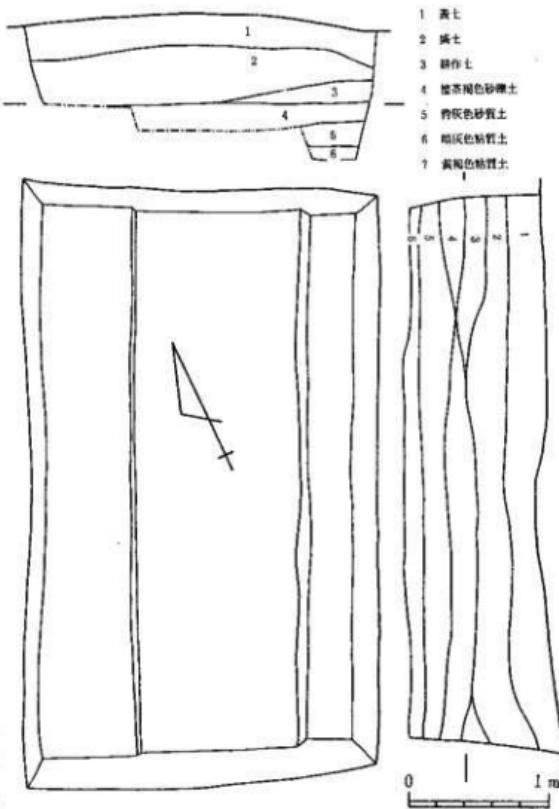
また、水を相当含んでおり、恐らく、調査地の南側にある台地からこの層中へ水が入り込んでいるものと思われる。第5層は暗灰色粘質土で、木片を少量含んでいる。土質や木片が残存していることから沼地状の状態を呈していたものと考えられる。第6層は砂礫土の地山である。

#### 第1トレンチ

本敷地は台地から下った所にあり、その南は約2mの崖となっている。施主の話によれば、以前は現在よりも少し緩やかな斜面であったという。このため既に削平を受けた箇所と遺構の残存する箇所の境が確認できることも考慮し、敷地の東側に南北に設定したトレンチである。

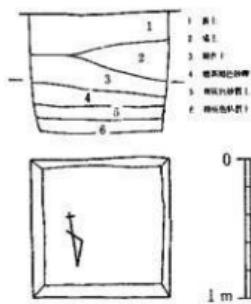
#### 第2トレンチ

第4層の広がりを追求するため、第1トレンチの西側に1m×1mのトレンチを設定した。



第7図 第1トレンチ平・断面図

ここで第4層を確認し、一定範囲広がっていることが明らかとなったが、湧水が著しく、しかも、予定建築物の基礎が位置するところであり、基礎の掘削深度より深くなつたため、途中で調査を中止した。

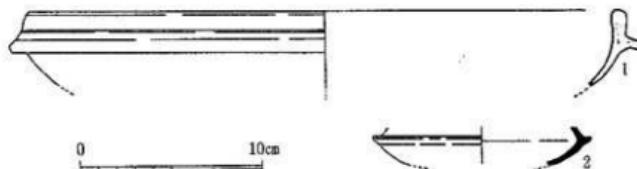


本調査地では遺構は認められなかつたが、第5層の沼地状を示す十層から、本遺跡が所在する台地下は湿地が広がつていた可能性が強いと考えられる。尚、第4層から一点ではあるが須恵器杯身が出土しているため、本遺跡は占墳時代から生活の営みがあつたものと推定される。

#### (4) 出土遺物

**第8図 第2トレンチ** 本調査地で出土した遺物としては瓦質鉢および須恵器片、備前焼片が少量みられるが、そのうち固化したものには瓦質鉢と須恵器杯身のみである。

**瓦質鉢** (1)は復原径32cmを測り、口縁端部から1.5cmほどの突帯を巡らしている。胎土は少量の砂を含むが概ね良質であり、炭素の吸着も良好である。須恵器杯身(2)は口径および器高の小さい型式のもので、底部と口縁端部を欠損している。



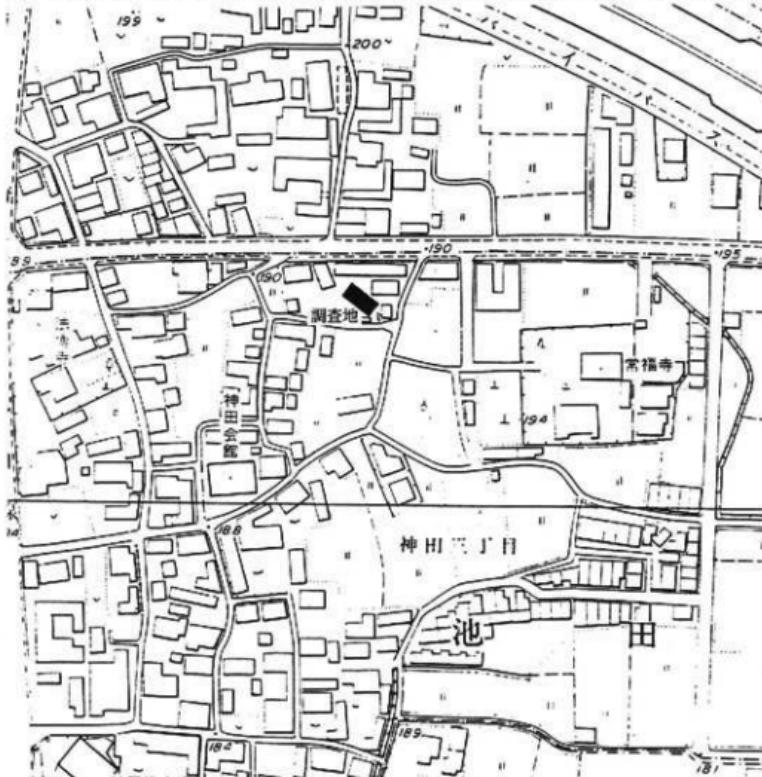
第9図 出土遺物実測図

### III. 神田南遺跡発掘調査

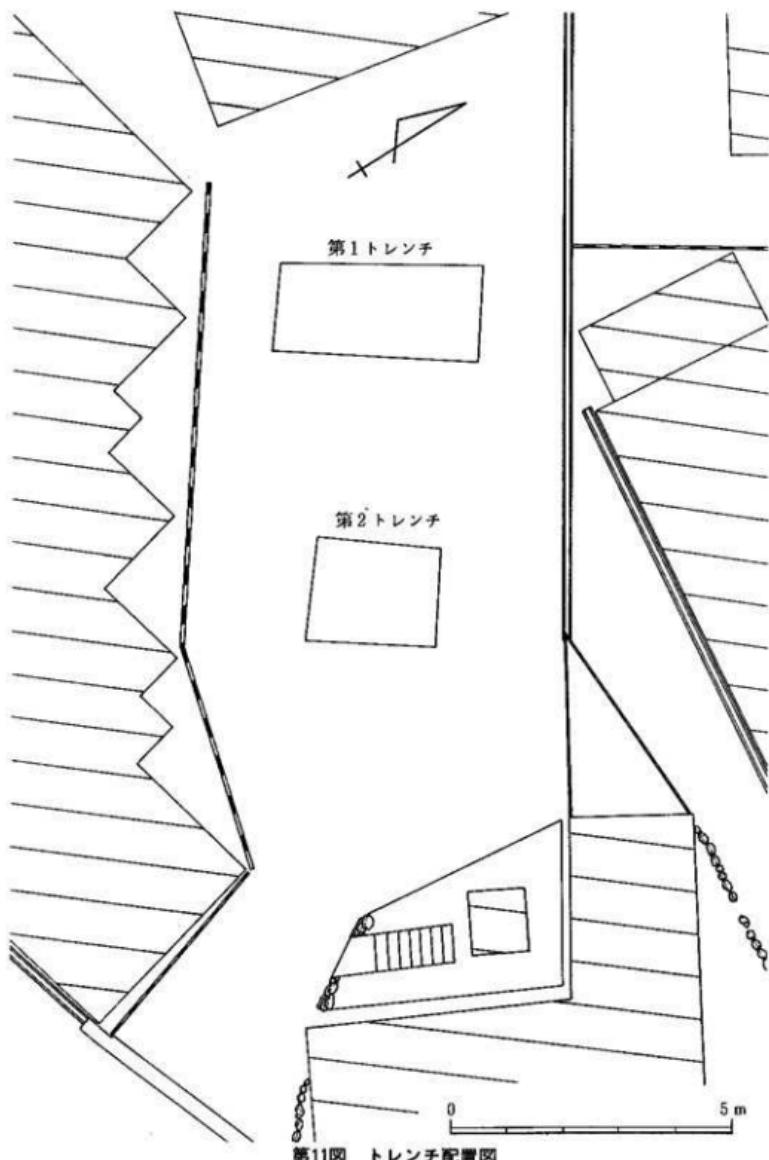
#### (1) はじめに

神田南遺跡は池田市神田3丁目に所在する。道路工事の際に弥生土器、須恵器が数点出土したため、遺跡の存在が明らかになったものである。しかし、今まで発掘調査が実施されていないため、遺跡の性格や範囲等不明な点が多い。

本遺跡は、五月山から平野部に張り出した起伏の少ない台地縁辺部に立地している。本遺跡の西方300mには猪名川があり、その縁辺は、工事の立会の所見から、氾濫原であったようである。本遺跡が立地する台地には神田北遺跡のほか、須恵器を伴った土坑が検出された門田遺跡があり、南方の猪名川と箕面川が交わる地点の東の位置には豊島南遺跡がある。豊島南遺跡



第10図 調査地位位置図



第11図 トレンチ配置図

では、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代中～後期の竪穴式住居跡を検出している。更に南の伊丹市中村では銅鐸が出土している。このように猪名川に沿った台地縁辺部には弥生時代から古墳時代の遺跡がみられる。

## (2) 調査の概要

調査地は池田市神田3丁目1750-1に所在し、個人住宅の改築に伴う事前調査である。土層の状況を把握するために、調査に着手する際 $1\text{m} \times 1\text{m}$ のトレンチを設定した。この結果、地表下30cmで円礫が集中する箇所がみられたため、この範囲を明らかにするため、敷地内に2カ所トレンチを設定して調査を行った。

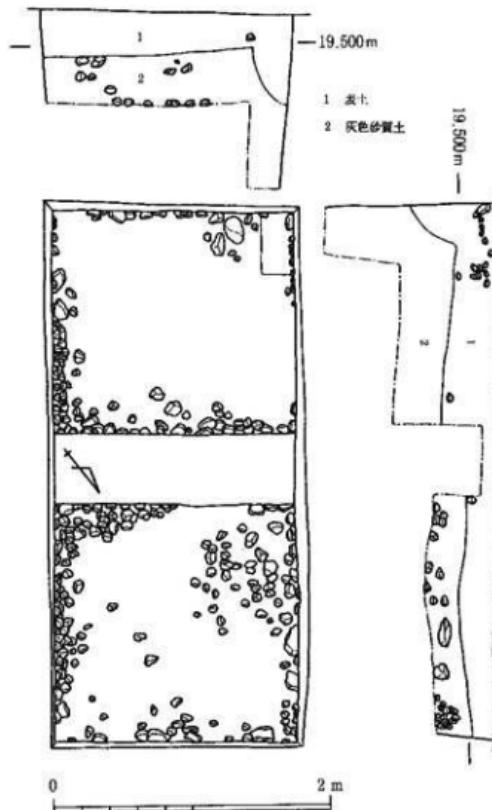
### 第1トレンチ

敷地西側に設定した $2\text{m} \times 3\text{m}$ のトレンチである。確認した層序は2層からなるが、後述する理由により地表面を検出する

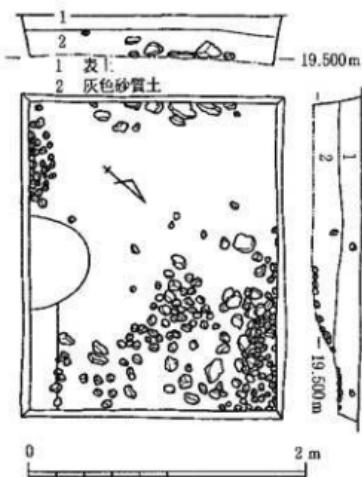
ことは不可能であった。第1層は畑に伴う耕作土で、この上を地均して建物が建てられていた。第2層は10cm大の円礫を多く含む砂土である。砂土はやや粗く、古墳時代から近世に亘る遺物を多く含んでいた。この層下の状況を確認するためトレンチ隅を1mまで下げたが同じ砂土が続いていた。このことから、円礫を伴い、また猪名川に近いことを考慮して、この砂土は猪名川の氾濫によるものと推定される。円礫が多く見られるため、あるいは、本調査地は河原であった可能性もある。

### 第2トレンチ

第1トレンチでみた状態が敷地の東側へ続いているかを確認するため設定したトレンチである。調査の結果、第1トレンチと同様の層を示していた。



第12図 第1トレンチ平・断面図



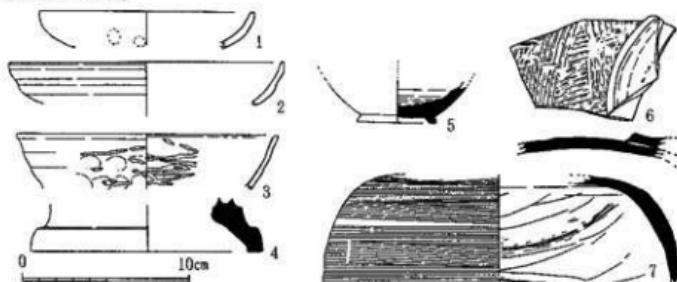
第13図 第2トレンチ平・断面図

本調査ではこのように遺構を検出することはできなかったが、土層の状況から本調査地付近は猪名川の氾濫原であったことが推定できるようになつた。しかし、砂土内に多量の遺物が含まれていたことから、上流に河川によって削られた遺跡が所在しているものと思われる。

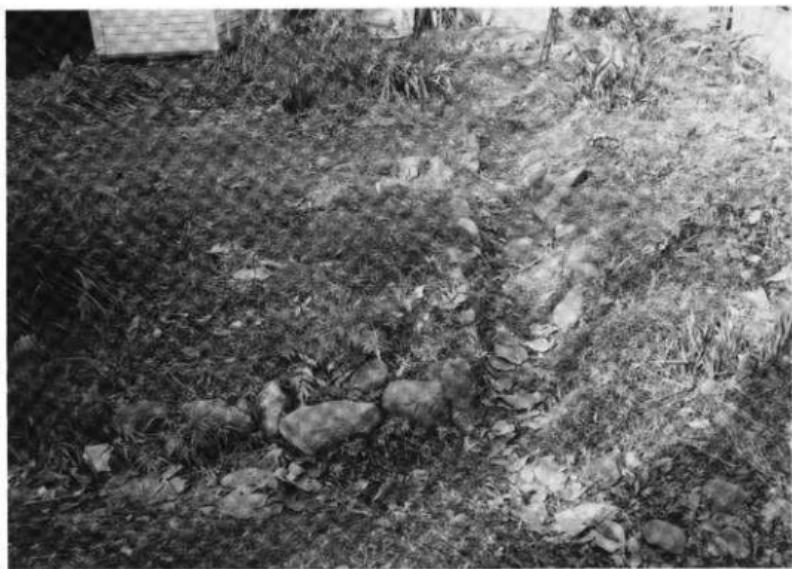
(3) 出土遺物

上述したように、砂土内に上流の遺跡を削って運ばれたと思われる遺物が多量に含まれていた。その中には土師器、須恵器、灰釉、瓦器のほか染付碗も含んでいる。しかし、殆どが細片化して図化したのは少量である。また、土師質のものは表面が著しく摩滅して時期を比定することが困難なものが多い。

(1)は土師質器の皿で、推定口径13cmを測る。表面は摩滅が著しく底部附近に指頭圧痕が認められる。(2)も土師器皿で、推定口径16cmを測る。内外面ともヨコナデによって仕上げられている。(3)は和泉型瓦器碗である。外面は指頭圧痕があり、その上をヘラミガキが雜に施される。内面もヘラミガキが雜に施される。(4)は須恵器の脚部である。内面の上方は内側へカーブを描いており、低脚であると思われる。(5)は須恵器皿の底部で高さ5cmの低い高台が付けられている。(6)は須恵器皿の肩部から腹部まで残存するものである。外面はカキメ、内面は斜め上方に雜にナデ上げている。(7)は壺と思われる破片に杯蓋が焼成段階で付着したものである。壺と思われる破片の外面には平行タキがあり、内面には同心円文が見られる。杯蓋は推定口径14.6cmを測るもので、外面は丁寧な回転ナデが認められる。



第14図 出土遺物実測図



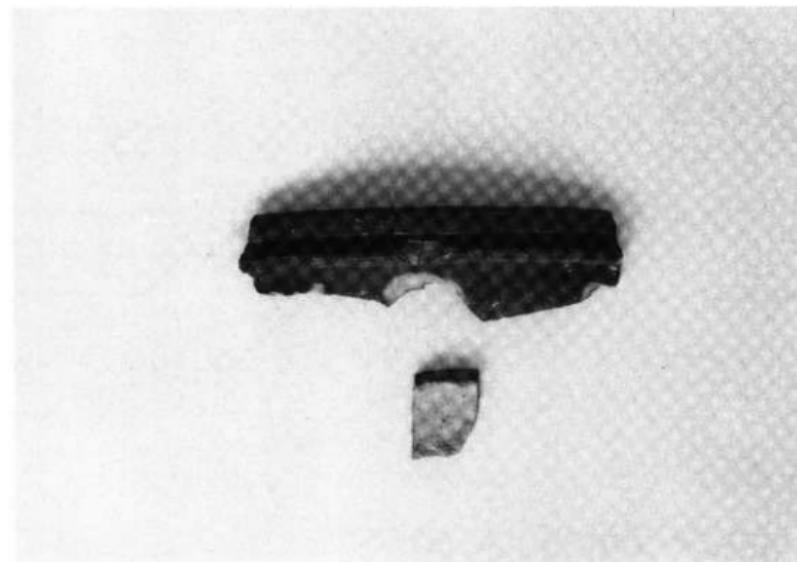
(1) 調査前の状況



(2) 第1トレンチ (南から)



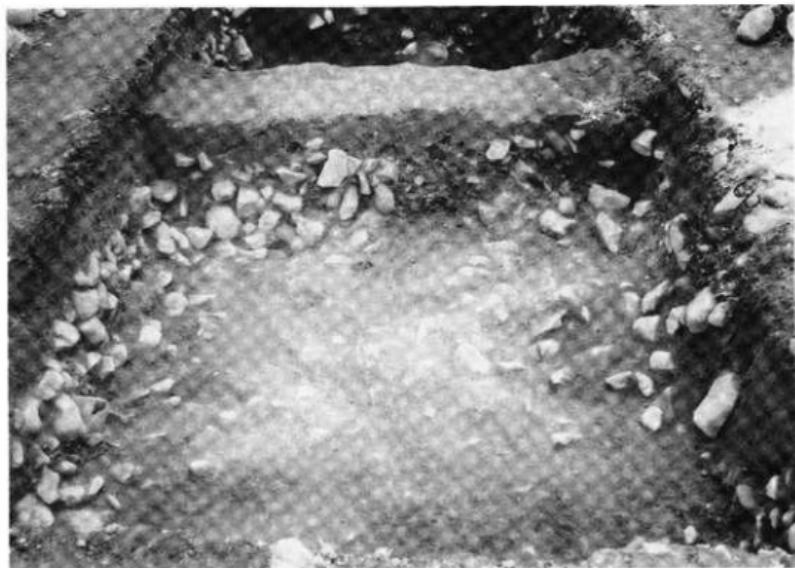
(1) 土層断面



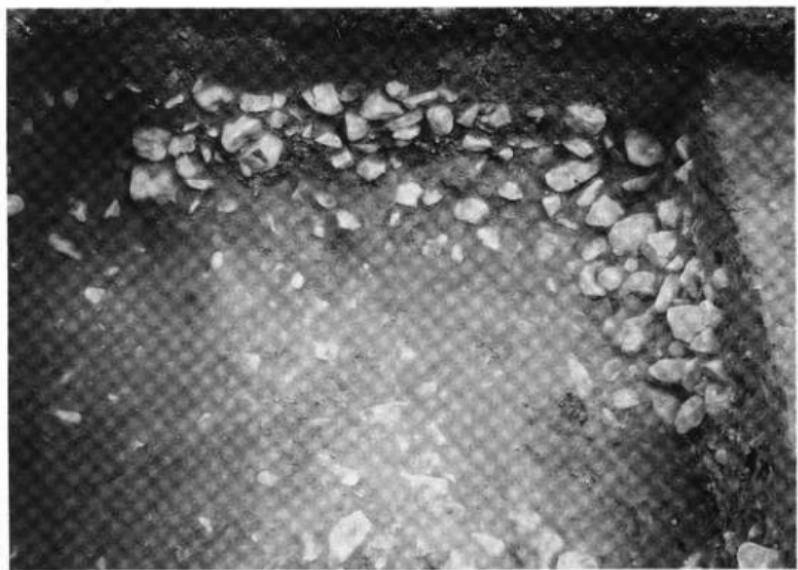
(2) 出土遺物



(1) 調査前の状況



(2) 第1トレンチ



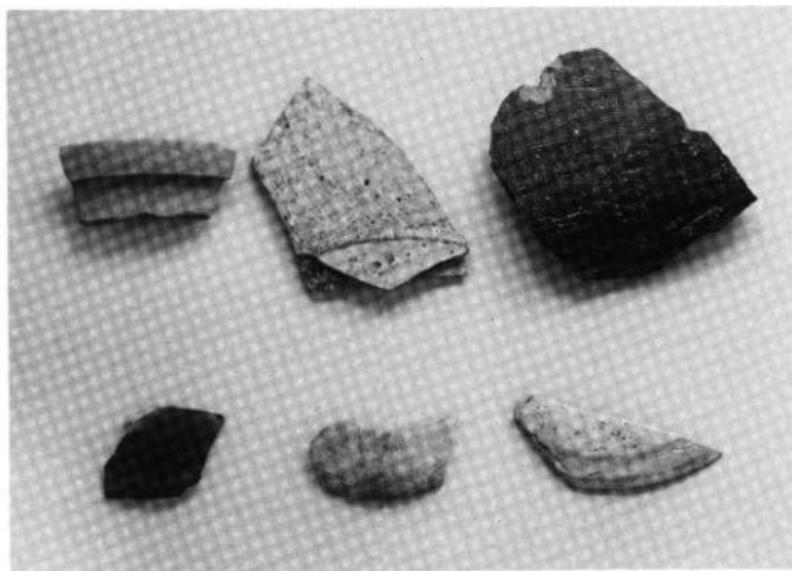
(1) 第1トレンチ土層断面



(2) 同上



(1) 第2トレンチ



(2) 出土遺物

池田市文化財調査報告第11集  
池田市埋蔵文化財発掘調査概報  
1989年度  
1990年 3月  
発行 池田市教育委員会  
池田市城南1-1-1  
編集 社会教育課 文化財係  
印刷 西村印刷株式会社